

大統領像形成としての「テレビ・ディベート」 —— 1960年第1回米国大統領候補討論における ケネディを事例として ——

松本 明日香

序章

1960年9月26日(月)アメリカ合衆国東部時間夜10時30分から、史上初の大統領候補者間のラジオ・テレビ・ディベート(以下テレビ・ディベート)が放映された。撮影場所はイリノイ州シカゴにあるCBS系のWBBM-TVスタジオである。主な登場人物は、二大政党からの大統領候補者である共和党のリチャード・ミルハウス・ニクソン(Richard Milhous Nixon)、民主党のジョン・フィッツジェラルド・ケネディ(John Fitzgerald Kennedy)、質問者5名、司会者1名。両候補による8分の冒頭演説と8分の結びの演説の間に、5人の質問者が両候補者に質問をする記者会見方式が取られた。ケネディの冒頭演説は以下のように始まった。

In the election of 1860, Abraham Lincoln said the question was whether this Nation could exist half slave or half free. In the election of 1960, and with the world around us, the question is whether the world will exist half slave or half free, whether it will move in the direction of freedom, in the direction of the road that we are taking, or whether it will move in the direction of slavery.¹ (Kennedy: opening)²

(1860年の選挙において、エイブラハム・リンカーン(Abraham Lincoln)は、この国家が半分の奴隷と半分の自由人に別れて存在できるだろうかという問いを投げかけました。1960年の選挙においての問いとは、私たちを取り囲む世界が半分の奴隷人と半分の自由人に別れて存在していくのか、自由の方向に動いていくのか、つまり私たちが取っている道を進んでいくのか、それとも奴隷の道を進んでいくのか、ということです。³)

上記のスピーチに特徴的なのが、ケネディがリンカーンに自身を重ね合わせていることである。ケネディは、1860年のリンカーンの選挙時の焦点である南北戦争下の黒人奴隷と、1960年当時の冷戦下の共産圏における人民を対比させている。大統領ディベートの元祖として有名である「リンカーン・ダグラス・ディベート」からほぼ100

年経って行われた1960年ディベートは、歴史的なレトリックから出発したのである。

1960年および1976年以降すべてのアメリカ大統領選挙で、大統領候補者間のテレビ・ディベートが行われてきた。1996年の調査によると、選挙広告、選挙ニュース、党大会報道、ディベート報道など各種選挙報道を比較した際、テレビ・ディベートが有権者に最大の教育的影響を与えている。⁴とりわけ1960年に行われた第1回テレビ・ディベートは、以下の3点から重要である。第1に政治文化においてである。市民にテレビの前で大統領候補のスピーチを審判させるテレビ・ディベートは、ユルゲン・ハバーマス (Jürgen Habermas) の言う討議民主主義としての公共圏を形成していると言える。⁵テレビ・ディベートの構造はガブリエル・A・アーモンド (Gabriel A. Almond)、シドニー・ヴァーバ (Sidney Verva) の言う米国の参加型政治文化を促進したようにも見える。⁶市民は居ながらにして、テレビを通して選挙という国政に参加することになったのである。

第2にメディア政治においてである。1960年テレビ・ディベートは選挙戦の主役がラジオからテレビへ移行した代表的できごとであり、二大政党からの大統領候補者がテレビ上で対峙する初めての試みであった。第1回ディベートの視聴率は5つの全国的な世論調査によると有権者の60%ないし65%である。⁷約10%のラジオ聴衆の重複を除き、テレビに限定しても最低でも有権者の50%から55%が視聴したことになる。多数の視聴者がいる中で、映像と音声の両者が用いられるテレビにおいて、大統領像表象の変化があったのである。

第3に政治史においてである。劣勢であったケネディが世論調査結果を逆転させる重大な契機であった。⁸放送直後の新聞においては、引き分け評価も見られた。ニューヨーク・タイムズではディベートの SCRIPT は載せ、同紙で著名なジャーナリストであるジェームズ・レストン (James Barrett Reston) は、「どの候補者も勝たなかったし、負けもしなかった」と述べた。⁹しかし、第1回ディベートの数日後のギャラップ社 (Gallup Polls) の世論調査では、24%がニクソン、43%はケネディが勝利したとした。¹⁰同時期のシンドリンジャー社 (Sindlinger&Co.) の世論調査でも、ニクソン24%、ケネディ26%で、¹¹僅差ながらもケネディの勝利とみなした。

ニクソンはスピーチが巧みであるという評判をもともと持っていたが、テレビ・ディベートを通して、ケネディも引けをとらないところを有権者に見せることができた。そしてケネディは少数派のカトリック教徒で、若く、未熟であるように見えるなどの不安要素を持っていたが、落ち着いて政治的な知識を披露することで、視聴者の不安を幾分か払拭することができた。¹²1960年第1回テレビ・ディベートは、アメリカの歴史的転換点とみなされるのである。

実施後ほどなくして、1960年第1回テレビ・ディベートにおいてケネディがテレビの画面による「映像の力 (visual image)」でニクソンに勝利したという評価が定

着していった（図1）。¹³しかし、ここで注目しなければならないのは、国民が「記憶」しているケネディのディベートとは、決して音なしで生まれたものではないということである。そのため、1960年テレビ・ディベートに関して、言語と映像の両方に焦点を当てた研究が必要である。

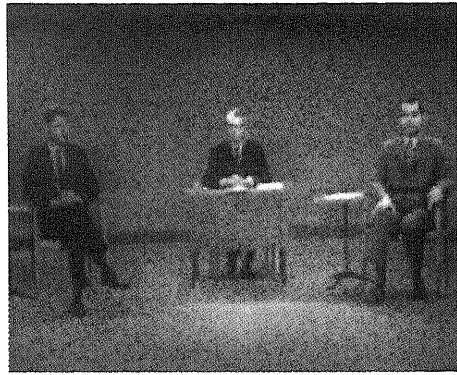


図1 1960年ディベート開幕 (0:01:02)

近年テレビ・ディベートへの新しいアプローチが生まれつつある。これまで、1960年テレビ・ディベートの研究において、アピールする映像面での分析と、冷静なロジックを中心とするスピーチ分析という、分析方向でのズレが生じていた。¹⁴新しいアプローチとは、レトリックを中心にスピーチを分析する手法で、スピーチを発想、レトリック、ジェスチャー、演技すべての融合と捉えたアリストテレスの『弁論術』の流れを汲んだものである。代表的なものとしては、『政治ディベートにおけるレトリック研究』(*Rhetorical Studies in Political Debates*)の第1章を担当したセオドア・オットー・ウィンド(Theodore Otto Windt)のレトリック分析がある。¹⁵ウィンドの研究は1960年第1回ディベートの言語にも重点をおいたレトリック分析を本格的に始めたものとして評価できる。しかし、ウィンドは、1960年ディベートにおいて画像が大きな影響を与えたという評価について、一切触れていない。1960年ディベートの画像に対する過去の評価に、レトリック分析がどう応えるのかを明らかにしなければ、レトリック分析をテレビ・ディベート研究に位置づけられない。スピーチとしてのテレビ・ディベートを解明することが必要である。

本稿はそこで、第1に映像と言語の組み合わせを分析するために、言語での説得に有効な手段である「レトリック」と、¹⁶第2に映像での説得に有効な手段である「非言語行動」を考察する。¹⁷本文では、必要に応じてスピーチや画像を掲載する。英語スピーチのレトリックを分析するため、原文を掲載する。画像は、大統領図書館から購入したDVDをデジタル・カメラでキャプチャーし、画素を落として取り込んでいる。¹⁸ジェスチャーや表情の変化を解釈するため、実際の分析時には静止画だけでなく動画も使用している。第3にケネディの選挙対策本部がレトリックを考案する際に作成した文書を分析する。¹⁹レトリックの考案過程を調査するのは、テキスト、映像分析の根拠を明らかにするためである。本稿では、テレビ・ディベートの映像面での覇者と言われるケネディ候補を、逆にスピーチ上での特徴を分析するための対象としてとりあげる。

ケネディの言語と非言語の特徴に、大統領像の形成がある。スピーチにおけるレト

リックと非言語行動から、第1章では大統領像の形成を、第2章では大統領像形成の乱れを分析する。第3章では、選挙対策資料から大統領像を形成するレトリック戦略を分析する。最終的には、歴史的転換点である1960年のケネディのテレビ・ディベートが、言語と非言語を融合して大統領像を形成していたことを、本稿は解明する。

第1章 スピーチにおける大統領像形成

ケネディは自身について語る時、3種類のレトリックと非言語行動を重ね合わせている。第1に、ケネディは歴史的大統領の名前や彼らの業績に触れ、自分の政策との共通点を強調し、歴史的な大統領の似姿として自らを表象している。第2に、その大統領の隠喩と自らの共通点を作るとき、ケネディは「米国イデオロギー」を頻繁に組み込んでいる。²⁰ 第3に第1の大統領の隠喩、第2の米国イデオロギーをイメージしやすくするため身近な例を用いている。²¹ 本節では第2、第3を関連させながら、第1の大統領隠喩を中心にケネディの言語と非言語の重なりを検討する。

ケネディが用いた主な大統領の隠喩には、リンカーン、フランクリン・デラノ・ローズベルト (Franklin Delano Roosevelt)、そのほかの民主党大統領、例えばトーマス・ウッドロー・ウィルソン (Thomas Woodrow Wilson)、ハリー・S・トルーマン (Harry S. Truman) がある。²² 以下、重点的に用いられたリンカーン大統領とF・ローズベルト大統領の事例を分析する。

1.1. リンカーン大統領としてのケネディ

ケネディはリンカーン大統領の隠喩を3つの方法で使用している。1つ目は共産主義からの自由を擁護するケネディと、2つ目は黒人の自由を擁護するケネディを、黒人の「自由」を擁護したリンカーンに重ねる方法である。²³ 3つ目は大統領前に副大統領経験のないリンカーン大統領に、ケネディ自身をなぞらせる方法である。

本論文冒頭に挙げたスピーチでケネディは、リンカーンにとっての黒人奴隷問題と同様、冷戦問題という難問に自身を取り組むことを表明している。このスピーチ箇所において、ケネディは笑みも困惑も見せず無表情である(図2)。ケネディは視聴者の方向、つまりカメラをまっすぐ見ている。正面を向いて、相手の目を見る行動は、説

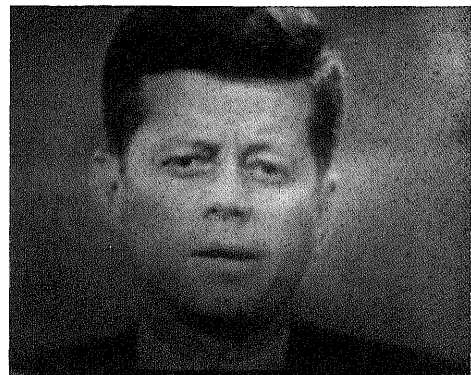


図2 リンカーンへの言及 (0:01:18)

得行動に適している。²⁴ テレビ・ディベートでは、見るべき相手である有権者は実際ケネディの目の前にいないので、カメラに視線を合わせることで、視聴者を凝視するのと同じ状況を作っている。そして、この表情は、数回の例外的な場合を除いて結びの演説まで、ほぼ継続している。

ニクソンがケネディの経験の無さを攻撃したときにも、ケネディは議員経験しかない自身を、リンカーンになぞらえながら答えている。議員時代は無名で、落選したこともあるリンカーンが卓越した大統領になったように、ニクソンほど知名度がなくても、自分は卓越した大統領になることができると、ケネディは答えている。このときのケネディも、図2と同様、笑みも動揺も浮かべず、正面を見ている。経験がなく未熟であることを指摘されたケネディは、言語と非言語の両面で、大統領としての経験が足りなくとも信頼に足りるイメージを形成しようとしている。

1.2. F・ローズベルトとしてのケネディ²⁵

ケネディは、中南米、アフリカ、アジア政策、資源開発政策、冷戦対処、国家財源など様々な分野において、F・ローズベルトとの共通点を提示している。特に強調されている中南米政策と資源開発に関するスピーチを分析する。まず、ケネディは、F・ローズベルト大統領下の第2次世界大戦のラテン・アメリカとの友好関係と、ケネディが目標とする1960年選挙時の冷戦下におけるラテン・アメリカ諸国との友好関係を、3つの方法で呼応させている。

The reason Franklin Roosevelt was a good neighbor in Latin America was because he was a good neighbor in the United States, because they felt that the American society was moving again. I want to recapture that image. I want people in Latin America and Africa and Asia to start to look to America to see how we're doing things, to wonder what the President of the United States is doing, and not to look at Khrushchev, or look at the Chinese Communists. (Kennedy : opening) [下線と網掛けは筆者による]

上記で、第1に、ケネディは網掛け部分のように、ケネディは「再び動く (moving again)」と表現している。ケネディはスピーチの他の箇所でも「前進する (moving ahead)」、「動く (moving)」という言葉を繰り返している。²⁶ 間を置きながら同じ単語を繰り返すレトリックである畳点法を用いることで、ケネディは目標を強調している。第2に、下線部のように、ローズベルトの友好関係の対象国が「中南米」である一方、ケネディの友好関係の対象国は「中南米、アフリカ、アジア」と拡大されている。狭い対象範囲から広い対象範囲にと、段々と調子を強め、盛り上げていくレトリック

である漸層法を使用している。以上より、ケネディはローズベルト時代の「前進」と、自身の目標とする「前進」を呼応させていることがわかる。²⁷

このスピーチに合わせて、ケネディは特徴的なジェスチャーを見せた。ラテン・アメリカ、アフリカ、アジアとの友好関係を築く抱負を述べたとき、それまで直立不動であったケネディが片手で簡潔なジェスチャーを見せている（図3）。右手で握りこぶしを作り、上下に数センチ程度、地域名にあわせて振っている。ジェスチャーについて、ケネディはアイゼンハワーほどに手を振り上げるのは好まず、かといって、労働者を対象にするため、手を振るだけでは弱すぎると考えていた。²⁸ この簡潔なジェスチャーによって、ケネディは、落ち着きを保ちつつも、「F・ローズベルト大統領としてのケネディ」というイメージを強調している。



図3 F・ローズベルトに言及（0:07:40）

上記のスピーチの直後に、「困難な時期の仕事」に関して、再度、ケネディはローズベルトを自身になぞらえている。

In 1933, Franklin Roosevelt said that in his inaugural that this generation of Americans has a "rendezvous with destiny." I think our generation of American has the same "rendezvous." (Kennedy : opening) ²⁹ [下線と網掛けは筆者による]

上記のスピーチにおいて、ケネディは3つのレトリックを用いている。第1に、下線部のように、ほぼ同じ長さの文章である平行体を使って対応させ、1933年におけるローズベルト時代のアメリカ人と、ケネディの時代のアメリカ人を対比している。第2に、網掛け部分のように、「会合 (rendezvous)」を、間を置いて繰り返す畳点法を用いて、F・ローズベルトの「運命との会合 (rendezvous with destiny)」について、ケネディの「同じような会合 (the same rendezvous)」と続けて対比している。第3に「同じ (the same)」と明記する直喩法で二者間の共通性を強調している。直喩法は、似ていないはずのローズベルト時代のアメリカの運命と、ケネディ時代のアメリカの運命の相似性を特に強調している。³⁰ 以上の3点によって、ケネディは、F・ローズベルトの「経済政策」への抱負と、自身の「冷戦対処」への抱負を結び付けようとした。

ケネディは、経済政策の一環として、ローズベルトのニューディール政策のテネシー

峡谷ダムやグランド・クーリー・ダムを賞賛し、一方で現政府の資源政策を批判した。ケネディは自らの政策をF・ローズベルトの政策「と同じように(in the same way as)」と再度、明示的になぞらえ、F・ローズベルトのテネシー峡谷開発を自己の天然資源開発と対比している。³¹

資源開発に言及しながらケネディはジェスチャーを見せている。次の十年間に正しい道に進むための指針を大統領が示さなければならないとし、「教育において、経済成長において、また天然資源の開発において」と、意味上の節に言葉を3回区切り、その節にあわせて、3度ジェスチャーを見せている(図4)。右手の平を下に向け、首の高さに上げ、前方に3度突きつけるジェスチャーである。このジェスチャーによって、それまで「大統領」を自身に重ねながら語ってきた、「教育」「経済」「資源」という3つの公約を、ケネディは総合的に強調している。



図4 公約を整理 (0:50:55-59)

小括

ケネディは、「前進」「運命」というキーワード、年代、平行体による文章の呼応、落ち着いた表情、特徴的なジェスチャーによって、リンカーンとF・ローズベルトの大統領像を、視聴者に連想させている。最後の結びの演説を行なったときの表情も、冒頭演説の表情とほぼ同じである(図2)。ケネディは「私たち民主党は大きな任務をまっとうしようとしているのです」と、決意を語って結びの演説を終える。その後5秒ほど動かず、笑みを浮かべず、口を結び、姿勢を正し、前をじっと見て、「大統領」のイメージの余韻を残している。ケネディがテレビ・ディベートで勝利した原因の一大要因と言われるケネディの「アピールする映像」とは、「アピールするレトリック」と「アピールする非言語行動」が巧みに融合して成り立っているのである。

ケネディが歴史上評価の高い大統領にたびたび言及をし、その大統領の隠喩の取り込みを図った。³²特に、ケネディは、1960年当時人気の高い歴代大統領である民主党F・ローズベルトと共和党であるが超党派的存在であるリンカーンの隠喩を頻繁に用いた。ケネディがスピーチ上でアメリカの歴史に関する表現を重んじたことは、歴史家に自分の政権を評価してもらいたいと語る結びの演説(Kennedy: closing)からも検証できる。

第2章 スピーチにおける大統領像形成の乱れ

ケネディは自己言及において様々なレトリックを用いて鮮やかにアピールをした一方で、ニクソンや質問者からの攻撃に対して防御は不十分な箇所があった。第1にトルーマン大統領の隠喩の一部破棄、第2に大統領の隠喩を用いないままの民主党の分裂の一部承認、第3に質問を遮る行動がある。第1章で描かれた大統領像に反する内容のスピーチには、言語面にも非言語面にも乱れがみられる。

2.1. 「トルーマン大統領像」の破棄

ニクソンは冒頭演説で、民主党前大統領であるトルーマンの国内政策を、激しく批判をした。この批判によってケネディのスピーチに2種類の動揺がみられる。第1に、ケネディは民主党の大統領の1人として挙げていたトルーマンを、「大統領像」から外さざるを得なくなっている。第2に、反論をするタイミングのズレが生じた。タイミングのズレとは、ケネディが直前のニクソンの発言に反論するはずの時間枠で、ケネディはニクソンの一つ前の冒頭演説に反論をしているという錯綜した答え方である。この時間帯のズレに関して、ケネディは「私が考えていたことは」と前置きをして、下記のように述べている。

When you talked about the Truman administration, you--Mr. Truman came to office in 1944, and at the end of the war, and the difficulties that were facing the United States during that period of transition, 1946, when price controls were lifted, so it's rather difficult to use an overall figure taking those 7 years and comparing them to the last 8 years. I prefer to take the overall percentage record of the last 20 years of the Democrats and the 8 years of the Republicans to show an overall period of growth. (Kennedy : Nixon1) [下線は筆者による]

上記では、下線部のように、7年間のアイゼンハワー政権の経済政策と比較する中で、1つ前の8年間の民主党トルーマン政権だけではなく、民主党F・ローズベルト政権を含めた20年間で考えるべきだと、ケネディは時間幅の変更を提案している。ケネディは、トルーマン政権期には戦争末期であり法律の変化があったので例外視すべきだとし、少なくとも経済に関しては、ケネディは使用できる大統領像からトルーマンを外している。³³ この箇所でも、図2と同じ、ケネディの大統領像に適した非言語行動が見られるが、レトリックとのズレがある。

2.2. 質問の遮り

ケネディは不利な質問において、言語面でも非言語面でも対話者の発言を遮る傾向があった。質問者であるNBCニュースのサンダー・バノカー (Sander Vanocur) と、CBSニュースのステュアート・ノビンス (Stuart Novins) による質問を、ケネディは5度も遮った。遮る場面は、質問者がケネディの公約の弱点をついたとき、かつ、反論の中で大統領像が十分に提示されなかったときに見られる。ケネディが顕著に遮ったノビンスとのやりとりを事例として第2節では分析する。

ノビンスは、社会福祉を増やす政策を主張するケネディが、国家財源をどのように調達するのかを追及した。アメリカ合衆国の国家財源には主に2種類ある。その1つである国債をケネディが減らすつもりであるという前提にノビンスは立ち、それならもう一方の財源である国民の税金が重くなるという意味ではないかと尋ねようとした。質問者のノビンスが「これが意味するのは……」と言いかけているところで、ケネディはノビンスを遮って、前提となる国債削減を強く否定している。

さらにケネディと質問者の押し問答が続く。ケネディは「今は国内外に問題があり、国債を削減できる状態ではないので、国債を削減するつもりはない」とノビンスの質問の前提を否定している。この後ケネディは詳しく説明するが、ノビンスも退かずにケネディの前提を否定する発言を再度しようとする。ノビンスが再度質問を始めると、ケネディがノビンスの質問を遮りながら「いいえ、全く違います」という強く否定する。しかし、ノビンスはさらに質問を続けようとする。ノビンスが国債削減に関するケネディの過去の演説を説明しようとする、再度ケネディがノビンスを強く遮る。最終的に、ケネディが質問者から質疑応答の主導権を奪い、建設しながら売却する方法を採り、均衡予算内で公約を実施するという弁明スピーチに入っている。これらの遮りからケネディが強硬に質問者との質疑応答に臨んでいることがわかる。³⁴

ケネディは、遮るとき、今までと異なる非言語行動を見せている。ケネディは、それまでの正面を見て微動だせず語るスタイルとは異なり、視線を誰も居ない左側を向いて、苦笑いを浮かべ、体を左右に揺らして、軽い焦燥を見せている。³⁵ 予定されている照明角度と顔の位置があっていないためか、このときは顔に影が落ち、今まで照明で飛ばされていた額の皺も見られる。このケネディの表情の画像は、質問者との混迷したやりとりを強調している (図5)。続けて同じ質問者ノビンスの質問を再度遮り、話の主導権をついに握り、自身のスピーチを本格的に始めるときも、ケネディは再び薄っ

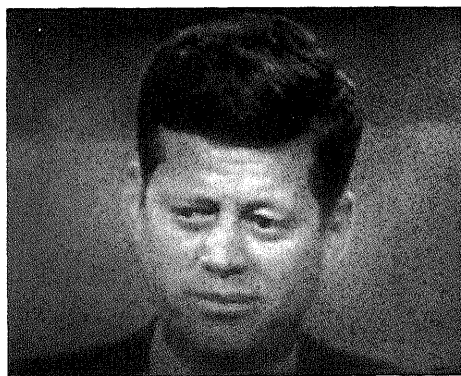


図5 質問者への遮り (0:30:30)

すらと笑みを浮かべている。顔の角度もまっすぐ正面を見るものではなく、斜めに傾いている。これらの、画像の乱れは、やりとりの乱れを強調するものとなっている。ただし、このあとケネディがスピーチを始める最中に、ニクソンの落ち着かない画像が挟まれるので、動揺した画像という点では、ケネディ、ニクソンの両者とも、この時点では五分五分と言える。以上のように、大統領像を用いず苦戦したときに、非言語行動での乱れも同時に見られる。

2.3. 民主党の分裂

民主党の分裂に関してニクソンに攻撃されたケネディは、苦しい反論と弁明を強いられた。このとき、ケネディはレトリックを乱れさせ、体を大きく揺らし、不安定な表情を見せている。

ケネディが苦笑いを浮かべて質問者の話を遮り、法案に関して弁明すると、今度はニクソンがその法案に関して厳しく追及をした。ニクソンに追い込まれる中で、ケネディは「それではニクソン副大統領が極端すぎると申された法案を少し検討してみたいと思います」と、弁明を始めた。このとき、今まで画面の中央に位置していた体を、画面から見て左に大きく揺らしている（図6）。視線もカメラを通して視聴者に向けていたものが、斜め前方へ、ずれている。この直後に、「年間100万ドルもの商売をしているような商店や会社で働いている人々に、最低1時間1ドル25セントの賃金を保証するもの」であると、具体例を挙げるレトリックを用いながら法案支持を正当化して仕切りなおしている。ニクソンの攻撃からケネディの反撃へのスピーチの移行する中で、このケネディの体のブレが画像を揺さぶっている。

数字を用いた弁明をする際も、体を揺らしている。これは、ケネディが、「下院議事運営委員会では、8人の民主党員のうち少なくとも4人がこの法案の本会議上呈に賛成した」という中の「4人は」を語るときである。このとき、ケネディは頭を斜め上方へ向け、視線は何もない上空に向いており、数値を思い出そうしている（図7）。細かいことを思い出しているような視線と頭



図6 弁明1 (0:44:56)



図7 弁明2 (0:45:33)

の動きの背後では、数値の詳細が隠蔽されている。パターソンの紹介する調査によると、説得行動において、自信があるときは凝視をして、身体を正面に向け、自信がないときには視線が泳ぎ、身体の位置がずれる。³⁶ ケネディのこの非言語行動は、自信のないスピーチ内容を語る時のものである。質疑応答の際、冒頭や結びの演説と比較して、厳しい状況において乱れた言語と画像が見られる。

小括

ケネディは質疑応答においても表情をほとんど変えないが、厳しい状況や不意を突かれた内容では苦笑いや体の揺れや遮りによって動揺を見せている。ケネディは全体として第1章で見たように、スピーチの中で過去の大統領像を用いて、大統領像を形成したが、第2章で見たように、大統領像を形成できていない箇所も僅かながらあった。

第3章 レトリック戦略における大統領像形成

第1章、第2章で分析したテレビ・ディベートのスピーチは、選挙陣営がレトリックに関する提言と資料を収集し、スピーチ・ライターが纏め、ケネディが筆を入れながら作り上げた共同作品である。第3章では、選挙陣営の資料を分析することで、ケネディがどのようなことを強調し、あるいは弱める方針であったかを明らかにすることで、第1、2章のスピーチ分析を補完する。

資料は、ケネディの出生地ボストンにあるケネディ図書館・博物館が所蔵している。本稿は、『1960年ジョン・F・ケネディ選挙戦』(*John F. Kennedy 1960 campaign*) (全22巻)をもとに分析する。³⁷ 対策内容は多岐に渡る。ケネディの自己表象の対策、ニクソンへの対策、アイゼンハワーへの対策などがある。本稿では映像でアピールしたと言われるケネディの、スピーチにおけるアピールを分析するため、ケネディの自己表象に焦点を当てる。

歴史書を書き、ディベートでも歴史家に言及したケネディの自己表象のレトリックは、以下のように形成されていった。第1に民主党党本部が大統領像の復活を提唱していた。第2に、ケネディの選挙対策本部は、大統領像を形成するものとして、歴代大統領のみならず、著名人の声明、裁判所の判決文、古典的書物などの引用を集め、幾度も改訂した。民主党党本部の資料のみならず、雑誌、新聞も大量に集めている。第2に、テレビ・ディベートのレトリックの方針を定める戦略書が提出された。この戦略書をケネディ陣営が承認して膨大なトリックを絞っていったと推測される。図8は、1960年ディベートにおけるケネディのレトリックが取捨選択された過程を簡略

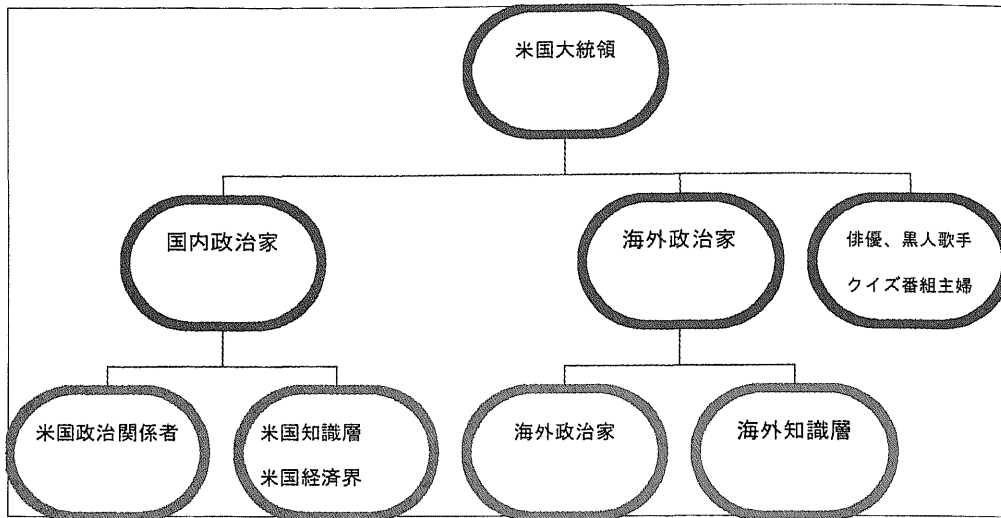


図8 レトリックの取捨選択

化したものである。1番下の段が引用集と民主党全国委員会の段階、真ん中の段が戦略書の段階、1番上の段が実際のスピーチの段階である。

3.1. 2つの大統領像：民主党全国委員会『アメリカ大統領制の復活』

『アメリカ大統領制の復活（*The Restoration of the American Presidency*）』という極秘文書（confidential）を、民主党全国委員会の顧問委員会が、大統領選挙に向けて、大統領候補者を薫陶し、支援するためのものとして、2度委員たちに配布している。³⁸ この文書がケネディの選挙対策資料の一部として残されている。31人いる委員会メンバー一覧には、ケネディ候補も入っている。1通目は1959年11月13日、2通目は1960年2月である。

『アメリカ大統領制の復活』は、大統領職とは何かということを説いている。その中で、ウィルソン、ペン、シャーマン、ジェファソンら、多数の大統領を中心とした著名人の引用が散りばめられている。これらの引用箇所横に、ところどころ手書きの線が引かれており、この箇所から引用集の一部が作られたことが推測される。

『アメリカ大統領制の復活』は、大統領にはブキャナン・タイプとリンカーン・タイプの2種類があると、例を挙げながら説明している。第1に、「大統領職を法的機構」と見なし、「国を代表した政治的指導者」としての考えを拒否したブキャナンの系譜がある。³⁹ 第2に、「大統領職を法的機構に付け加えて政治機関で」「大統領を問題の中心人物と見なし、社会の希望を点火し、新しい政治的再調整を図り、何かをしているときに何をしているのかを説明する」リンカーンの系譜がある。⁴⁰ 第1回テレビ・ディベートでケネディが言及した大統領ら、リンカーン、F・ローズベルト、ウィル

ソン、トルーマンは、全てリンカーン・タイプに含まれている。

『アメリカ大統領制の復活』の第2版目が1960年2月に提出されている。第2版では誤字脱字が改められているが、内容的にも文章的にも大きな変化はない。第2版には、ヘッドレターが添えられており、ここから、この文書が外交委員会の監督の下、『アメリカ大統領制 (*American Presidency*)』という著書を持つシドニー・ハイマン (Sidney Hyman) が執筆したことがわかる。

以上より『アメリカ大統領制の復活』から明らかになるのは、1959年の時点で民主党全国委員会が、歴史家を雇用し、歴代大統領と彼らのスピーチを分類していたことである。ケネディ陣営がこのパンフレットを活用したりしながら、以下で見るように引用集を何度も改訂していき、選挙スピーチを組み立てていったことを明らかにする。

3.2. 引用集

第1章で見てきたように、ケネディのテレビ・ディベートの特徴的レトリックの1つに、大統領の隠喩の活用があった。実際、ケネディ自身を中心に、ケネディ選挙陣営は1960年の1月頃からディベートの直前の9月頃まで、大統領のみならず、哲学思想家、評論家、最高裁判所判決という様々な分野からの引用集を作成しており、様々な引用を収集してきた。選挙対策本部は1960年1月5日に引用を27個、2月8日に6個、5月18日に22個、5月24日に72個、5月27日に16個、9月8日に11個と、他期日不明なものに97個と、頻繁に引用集の改訂を重ね、時折そこに手書きで評価を下している。本稿では、特に評価付けがされている1960年2月8日と、9月8日と、日付は不明ながら最大である引用集を取り上げ、関連文書を参照しながら、引用の取捨選択の意図を考察する。

(1) 2月8日の引用集

1960年2月8日には、6つの引用が集められている。6つの引用は、2月12日に、ケネディが1960年選挙の向けての抱負を語るために集めたと見られる。実際に2月12日のスピーチでも使用されている。引用にはA、B、Cの3段階の評価が手書きで加えられている。Aが付いている合衆国政府からの引用3つ、イギリスのメディアからの引用1つの、合計3つを下記で考察する。以下の表が、A評価のついた引用をまとめたものである(表1)。

表1 1960年2月8日の引用集 [筆者が史料より作成]⁴¹

	人物	属性	引用要旨
1	ウッドロー・ウィルソン	大統領	外交方針を大統領が示すべき
2	ジョン・シャーマン	議員、独占禁止法	大統領は憲法を遵守するよう努力すべき
3	デイビッド・ロー	英国風刺漫画家	合衆国の争点は英国にとっても重要である

合衆国政府からの引用の1つ目は、外交問題に関する大統領の職務として、第28代大統領ウッドロー・ウィルソン (Tomas Woodrow Wilson) の引用として、「必要となれば指針とならなければならない—すべての最初の判断を下し、すべての実行にあたって最初の一步を踏み出し、行動するための情報を提供し、その指揮を執り、大いに統率しなければならない」があげられている。⁴² ウィルソン大統領は、第1次世界大戦が勃発した中、合衆国が参戦するかどうかという判断に迫られた。第1回テレビ・ディベートにおいて、ケネディは自身と同じ民主党出身の大統領として、フランクリン・ローズベルトとトルーマンと並べて、大きな決断をしたウィルソンに言及している。

2つ目には、シャーマン独占禁止法 (Sherman Antitrust Act) を1890年に提案したジョン・シャーマン (John Sherman) が語った「憲法は、大統領の心の中の隙き間以外、高官の偶然の不測の事態に備えている。」を、引用している。⁴³ 憲法を遵守するべきだという大統領の責務を説いている。

最後のメディアからの引用は、風刺漫画家のデイビッド・ロー (David Low) の「私たちイギリス人はあなたたちアメリカ人の政治的論点を巡って争う。まるで、その論点が私たち自身のものであるかのように、ともかく、その論点とは、……運命によって、わたしたちが全て名誉あるアメリカ人になってきているということだ」である。⁴⁴ 外国から、それも合衆国自身が独立してきたイギリスから、アメリカへの賞賛と関心を表す引用を収集している。第1回テレビ・ディベートでは、風刺画や映画や小説などの文化メディアに関して、ケネディは直接言及しなかったが、選挙対策の時点では、風刺漫画家という投票する一般市民が共感を得やすい文化的な面にも、着目しているのがわかる。

他にB以下の評価がついた引用には、ペンシルベニアを創設したウィリアム・ペン (William Penn) の引用、合衆国初代財務長官であるアレクサンダー・ハミルトン (Alexander Hamilton) の引用、最高裁判所判決文がある。以上のように、政治家、裁判所、批評家などからの様々な引用が集められはじめていた。この2月の引用集は、2月のケネディのスピーチでも使用されている。

(2) 9月8日の引用集⁴⁵

1960年9月8日には、外交政策と大統領制に関するメモとして、引用文が11個集められている。それらの引用には、手書きでA、B+、B、C、無印の5段階評価が付けられている。Aがついた学者からの引用2つ、アメリカ政府からの引用3つの、計5つの引用を以下で考察する (表2)。

第1に、学者からの引用としては1つ目に、ギリシア哲学者ソクラテスの「もし人が、自分がどこの岸を航海しているか知らなければ、好ましい風は吹かない。」がある。

表2 1960年9月8日の引用集『外交政策と大統領制』[筆者が史料より作成]

	人物	属性	引用要旨
1	ソクラテス	ギリシャ哲学者	自分の行き先を知らないと、良い契機は巡ってこない
2	デニス・ウィリアム・ブローガン	英国歴史学者、政治学者	大統領は補助ではなく、コントロールする立場にある。
3	特になし	1936年米国連邦最高裁判所判決	大統領だけが国民を代表して語り、聴く力を持つ
4	トマス・ジェファソン(1987)	発言当時は副大統領、のち大統領	米国大統領選挙はヨーロッパにとって重要になるだろう
5	同上	同上	国家安全の危機を回避するためには、リスクを負わないといけな

ソクラテス自体は、第1回ディベートで示唆されない。しかし、選挙対策メンバーが、ギリシア・ローマの弁論術にも通じていた可能性を示唆する。⁴⁶

2つ目に、英国の歴史学者、政治学者であるデニス・ウィリアム・ブローガン (Denis William Brogan) の「大統領は常に運転手もしくはブレーキである。——彼は決してスペア・タイヤではない。」がある。⁴⁷ 第1回のテレビ・ディベートの中で、ケネディは「10年後の歴史家から、今、この時代を指して、アメリカの運が尽きた年と言われたくありません。私は、その歴史家たちに、今この時代を、アメリカに運が向いてきた、アメリカが再び立ち上がって前進を始めた時代だったと言って貰いたいです。」と歴史家に注目して語っている (Kennedy: closing)。引用集からは、実際にケネディの選挙対策本部が歴史家による大統領評を収集していたことがわかる。

3つの政府関連の引用のうち、1つ目は1936年のアメリカ合衆国連邦裁判所の判決文の「大統領だけが国民を代表して語り、または聴く力を持つ」がある。⁴⁸ 第1回テレビ・ディベート自体が、大統領候補が国民を代表して、大々的に国民に語り掛ける場であったことは象徴的である。ケネディ陣営は、新聞などの大型メディア資料だけでなく、ケネディの政策への反対ピラや反対風刺画などの市井のメディア資料まで集めて対策をした。⁴⁹ 大統領候補が「聴く力」を発揮した例と言える。

第2に、アメリカ合衆国建国の父祖と言われる第3代大統領トマス・ジェファソン (Tomas Jefferson) の引用が2つある。1つ目は、1787年に、憲法を議会が批准する前に予言した「アメリカの大統領選挙はいつの年か、ヨーロッパ諸国にとって、ポーランドの王を選ぶ選挙より面白くなるだろう」がある。⁵⁰ 引用された1787年当時、ジェファソンは副大統領であったが、議会の中に様々な対立軸があり、特に中央集権化に反対であった反連邦派と、賛成であった連邦派に分かれて、憲法制定について議論がされ、1787年に連邦派が中心となって合衆国憲法が制定された。引用の中で、アメリカの大統領選挙について語っているジェファソン自身が、のち1801年に大統領選挙に勝利している。ジェファソンは民主党の基盤となる連邦共和党を創設したので、民主党の選挙本部が引用するには相応しいと言える。

2つ目のジェファソンからの引用「大きな責任を受けもつ人々は、いざという時に、リスクを負う必要があり、その時というのは国家安全と、とても高い利益が賭けられている時である」がある。⁵¹ 第1回テレビ・ディベートで国債を減らすことに関して議論になった時に、ケネディは、ジェファソンと同じように、「政府は我々の安全に関わる重大な責務を負っており、我々はそれを果たそうとしているのです」と語った。ケネディもテレビ・ディベートの中で、共産主義と対立する冷戦期であり、多数の国内問題を抱える中で、国債を減らすことは考えていないことを、国家の「責任または責務」を果たすためだと説明している。以上から、これらの引用集が、のちのテレビ・ディベートに多大な影響を与えていることがわかる。

さらに作成日が不明なものの、11ページに渡る最長の引用集が作成されている。⁵² 米国大統領、米国政治家、米国事業家、英国政治家を中心に印がつけられている。特に、F・ローズベルトからの引用が3ページに渡り最多である。ついで、キッシンジャーからの引用が2ページに渡っている。以上から、ケネディ陣営が、F・ローズベルトを中心とした様々な英米政治関係者の引用を検討していたことがわかる。

3.3. 戦略文書

大統領像を形成する引用集が作られる一方、選挙対策の一環として、有権者の浮遊者層に対して「アピール」するレトリックが提案されている。テレビ・ディベート1月前の1960年8月27日に、劇作家のアレクサンダー・クラインが、ケネディに適したアピールの仕方を提示している。⁵³ クラインは、ケネディのスピーチ・ライターであるシオドア・C・ソレンセン (Theodore C. Sorensen) に、17ページに渡るニクソンの政策と選挙対策への分析と選挙対策への提言書を送った。クラインは、テレビ・ディベート独特のアピール方法と、大統領像の絞り込みとレトリックの先鋭化を提示している。実際のスピーチでも重複するレトリックが実際に使用されている。以下、映像でアピールしたと言われるケネディの、スピーチ上のアピール戦略を分析する。

(1) 「若い歴代大統領」

具体的には「感情面でのアピール」をクラインは強調している。それまでのケネディの選挙戦では、投票する時点で候補者を決める有権者らの気持ちに訴えかけるアピールが足らなかったと、クラインは分析する。⁵⁴ また、ケネディの「若さ」「宗教」を理由にして、ケネディに偏見を抱く極端に広い有権者層に対して、またニクソンが持つ特定の戦略に対して特に何も考えるところがなく、関わっていない人たちに対して、特別なアピールと接近方法を、この文書は説明するとしている。

その方法として、特にケネディに向いているのが、「人間的なイメージ (a humanized image)」と「若きフランクリン・ローズベルト (young F. D. R.)」効果の

両方であり、その両者統合を図る方法であるとしている。それが「よく考えない一般大衆」の意識に対してニクソンより強く、そして「考えている人たち」にも強く訴えかけるとしている。

社会福祉の一環として、何10万もいる身体障害者に対するの政策をまとめる中で、クラインは更にF・ローズベルトのイメージの使用例を挙げる。⁵⁵ ケネディの弱みと関連付けた身体障害者対策を、「ニュー・フロンティア」の1つに、クラインは位置づけている。第1回ディベートでは身体障害者の話は出ていないが、資源、外交、経済政策に関して、F・ローズベルトについてケネディは幾度も言及している。

クラインは「公民権運動」に関しては、「リンカーンの伝統」を纏った上で、「若々しい」統率力を強調するよう提案している。⁵⁶ 例文として、「変化は困難である」「全てのアメリカ人がこの困難なときに人々にすばらしく接している」などを挙げ、「アメリカ人は正しいことをわかる」と訴えよ、そして、リンカーン風の取り組みを描け、白人と黒人両者に訴えるため、若若しさでもって、法律の施行と立案を進めるよう勧めている。実際に、第1章で見てきたように、テレビ・ディベートにおいてケネディは、公民権のみならず、自由主義擁護や、経験のない大統領候補者の可能性を論じる際、リンカーンのイメージを活用している。ケネディはニクソンの7歳下であるだけだが、一般市民に「若い」と捉えられており、選挙陣営もそれを受けて「若さ」のイメージの強調を図った。そして、若さと熟練の歴代大統領という、相反するイメージを「若い歴代大統領」というイメージを打ち出すことによって、融合させようとしている。

以上のように、有権者の浮遊層をケネディ陣営に振れさせるための、「感情面でのアピールと影響力」をクラインは強調した。確かに、テレビ・ディベートが動かしたのは、初期の段階でどちらに投票するか未決定であった浮遊者層が大半であったと報告されている。⁵⁷ また、選挙陣営が具体例の使用を勧めていること自体は、ニクソン陣営もケネディ陣営も同じだが、浮遊票を動かす具体例を扱うかが異なる。⁵⁸

クラインは、歴代大統領のイメージのみならず、大衆文化のイメージも使用するよう提言している。ケネディの懸念材料である税法に関して、ドラマチックに人情味があるように語るべきだと、具体的な例を示しながら解説している。「ケネディの税法」は「マリリン・モンロー……テッド・ウィリアムズのような、映画スター、俳優、娯楽番組出演者、プロ野球選手、作家、職業人、社長に影響を与える」、と強調している。⁵⁹

しかし、第1回テレビ・ディベートでこの税制に関しての話が出た際、この具体例は使われなかった。大衆文化を用いて華やかさと人気を出すよりも、大統領の例を用いて真剣さ、真摯さを打ち出す方向性が、ケネディのディベートには見られた。大統領像を用いたレトリックを十分に活用しなかった税制に関して、第2章で見たようにケネディはテレビ・ディベートで苦戦した。

クラインは先に触れた公民権運動に関しても大衆文化の選挙での活用を訴えている。リンカーンの伝統に基づいてアピールすることは上記で述べたが、更に、告知できることとして2つの案をクラインは提示している。⁶⁰ 1：南部の代表人物をと連邦政府が協力して行動できる。2：映画スター、人気歌手、教会などのショー・ビジネスなどから、国民的地域的な代表人物を含めて、行動国民委員の新しいメンバーを任命できるだろうと、クラインは提案している。実際は第1回テレビ・ディベートの中で、ショー・ビジネスへの言及は見られなかったが、関連する広告の収集も行っており、選挙陣営での関心はあったことが伺える。⁶¹

以上のように、スピーチ・ライターの強い2つの提案のうち、ケネディらに1つは採用され、1つは採用されなかったことがわかる。採用しないという選択は一種の沈黙法である。沈黙法は語らなかった内容が表に出さないだけでなく、他の内容を強調する。大統領の例が使用され、大衆文化の例が使用されなかった。これは、未熟で経験が足りないと言われたケネディが、そのイメージを覆すために、大衆文化よりも大統領アイコンを強調することが特に必要だと判断したためであろう。

(2) 大統領像を生かす外交戦略

クラインは、(1)で見られた大統領像を生かし、ニクソンの戦略よりすぐれた戦略であるのが、以下の外交政策強調案であると主張している。「ニクソンにパンチを喰らわせて打ち破ることができれば、勝利の道を彼から奪える」とし、「ニクソンのテーブルをひっくり返す」ために、彼が話よりも先に特定の話題について主張し、ニクソンに「私もそう思う (me-too)」と言う状態にして、その状態を継続させることを強調している。⁶² 確かに第1回ディベートの中でケネディがニクソンよりも先に力強く外交問題に触れたことによって、ニクソンに「ケネディの外交路線にある程度は賛成だ」と同意させることに成功している。

その外交政策に関して、外交分野でコンサルタントとしても活躍しているクラインは、外交政策を先鋭化する方法が重要であると主張した。彼は、主な提案をケネディ＝ボールドウィン外交政策に融合させ、磨き上げることを唱えた。提案の目的は、ディベート上で主導権を握りながら、戦争のリスクが少ないにしても、ニクソンが持っている「表面的な計画」に打ち勝つためであり、「鮮明に、説得的に、斬新な目的意識と力強さを伝えるため」だとしている。確かに、クラインが述べたように、ニクソンの得意分野として、ソ連に渡ってフルシチョフと討論するなどの経験に基づく外交分野が挙げられる。しかし、実際ケネディは内政問題がトピックであった第1回ディベートの冒頭で、いきなり外交問題に切り込んだのである。

「早期選挙」の一環として、ディベートが始まるまでに勝つ下地を作るべきだとクラインは主張している。その下地の1つとして、クラインは、「可能である刺激的で

妥当な戦術」としての国外周遊をマックミランと協議すべきであると提案している。クラインは、ニクソン・ケネディ共同周遊ですら計画してもよいだろうと提案している。ニクソンがどんな行動を取ろうと、ケネディは実を得られるからと補足している。そもそもテレビ・ディベートは、ケネディにとっては、試合が五分五分でも、認知度を上げる点から有利に働くものであった。以上から、クラインが、経験に基づいてレトリックを作るのではなく、レトリックを組み立てるために、経験を得られる行動をするという逆説的な提案までしてはいるのがわかる。実際、スピーチの中で、ケネディは具体的な外交経験例を挙げている。

小括

以上のケネディ陣営の選挙対策資料から、本稿はケネディ陣営が大統領像の収集と取捨選択したことを明らかにした。同時に、その大統領像を生かすために、早期選挙と外交政策の強調が提言された。時を同じくして、民主党本部は大統領のイメージの復活を求めている。ケネディ陣営は、その民主党本部の資料も活用した。最終的に、彼らは、大統領像に関する様々な引用を何度も収集し、取捨選択していったのである。

結章

はじめの質問に立ち返ると、映像のインパクトで知られる1960年第1回テレビ・ディベートに、スピーチはどのように関係していたのか、ということである。説得という観点から、言語ではレトリック、映像では非言語行動に着目して、分析を進めた。レトリックの分析結果を補強するためにレトリックを作り出す過程を、選挙戦略文書を用いた。本稿が明らかにしたのは、ケネディがスピーチにおいて言語と非言語を融合させ、アピールするための大統領像を形成したということである。

ケネディのスピーチには、第3章で見たように、アピールを主眼とするレトリック戦略があった。実際のスピーチで、第1章で見たように、ケネディは様々な政策に結びつけながら大統領像を提示し、同時に、映像面では落ち着いた表情と安定した姿勢と最小限の非言語行動が見せた。これらのレトリックと非言語行動が呼応しあって、ケネディのリンカーンやF・ローズベルトの似姿としてのケネディの大統領像を形成している。しかし、第2章でみたように大統領像を提示するレトリックを使用しなかった質疑応答の一部では、ケネディのスピーチに乱れが見られた。途中で話を遮り、発話が停止し、身体は左右にぶれ、視線は泳いで、苦笑いをみせたりした。けれども全体から見ると、それ以外の部分では、ケネディは十分に事前の準備を活用していた。

1960年に華々と大統領像を形成したテレビ・ディベートだが、その後、中断と復活の歴史を辿った。1960年以降16年間に渡ってテレビ・ディベートは行われなかった。しかしニクソンのウォーター・ゲイト失脚を受けて副大統領から大統領になったジェラルド・R・フォード（Gerald R. Ford）により、1976年にテレビ・ディベートは復活した。こうして大統領像の使用は、形を変えながら、アメリカ合衆国米国大統領スピーチのなかで脈々と受け継がれている。1960年に歴代大統領のイメージを提示したケネディもまた、大統領ウィリアム・J・クリントン（William J. Clinton）の大統領像とされた。クリントンはケネディと高校生のときに握手したことをのちのちまで語っている。歴代大統領のイメージは、時代にあわせながら使用されてきているのである。

大統領像として用いられるイメージの種類にも、時代と状況により変化がある。ケネディ選挙陣営内で大衆文化の使用が却下されたことを、本稿は第3章で明らかにした。しかし、のちにケネディも対戦者ニクソンも、先に挙げたクリントンも、政治スピーチにおいて大衆文化を使用している。ニクソンは歌手エルビス・プレスリー（Elvis Presley）と握手する姿を写真に収めている。クリントンは選挙戦の中で楽器を持ち、プレスリーとの共通性を取り挙げた。大統領像は変化しながら、候補者たちに引き継がれているのである。

以上のように、1960年第1回テレビ・ディベートでは大統領像に関するレトリックは、歴史を転換させた要因の1つであった。非言語行動だけでなく言語によっても作られたケネディの大統領像は、接戦であった選挙においても繰り返し再生産されたのだ。そして、その大統領像は、米国の参加型政治文化と複雑な関係を持つ。テレビ・ディベート自体は、市民を視聴者として参加させる政治的なコミュニケーションの1つであり、候補者2人がディベートをする行為は討議民主主義の結晶といえる。一方で、市民の前で討議する中で、国家のイデオロギーを高揚し、国家を統制する大統領を理想として描くケネディのスピーチは、隠れた臣民型政治文化の発露とも捉え直せるだろう。

注

¹ John Fitzgerald Kennedy Library. The first Kennedy-Nixon debate. 2000.
<<http://www.jfklibrary.org/debates-1960.html>>

² スピーチは、大きく分けて、冒頭演説、質疑応答、閉会演説という流れになっている。質疑応答では質問を受けた候補の後に、司会者の合図と共に、もう片方の候補が反論をすることになっている。引用箇所表記は、本稿では話者であるケネディ、ついでスピーチの順番を（話者: スピーチの順番）とする。スピーチの順番は、冒頭演説（opening）、ケネディへの1番目の質問から5番目の質問（Kennedy 1-5）、ニクソンへの1番目の質問から5番目の質問（Nixon 1-5）、閉会演説（closing）とする。

³ 訳は筆者による。

⁴ Sidney Kraus. *Televised Presidential Debate and Public Policy*. Second Edition. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates Publishers, 2000.

メディア研究センター・ローパーセンター (The media study center/ Roper Center) によると、1996年9月の電話アンケートで、1002人の選挙登録者に、選挙を学ぶことができるものを複数回答してもらった結果、最大の45%が大統領ディベートを観ることだという回答を得ている。続いて、新聞の選挙ニュースを読むこと (32%)、テレビニュースを観ること (30%)、新聞の社説を読むこと (23%)、ニュース雑誌の記事を読むこと (21%) と以下続く。

⁵ ユルゲン・ハーバーマス『公共圏の構造転換』細谷貞雄訳、東京、未来社、1988。

⁶ ガブリエル・A・アーモンド、シドニー・ヴァーバ『現代市民の政治文化—5カ国における政治的態度と民主主義』石川一雄、薄井秀二、中野実、岡沢憲美、深谷満雄、木村修三、山崎隆志、神野勝弘、片岡寛光訳、東京、勁草書房、1974。

アメリカ合衆国政治文化の調査が、丁度1960年選挙の際に行われているので、調査自体は過去のものであるが、本稿に適切である。

⁷ Elihu Katz, Jacob J. Feldman “The Debates in the Light of Research: A Survey of Surveys.” *Great Debates*. Edited by Sydney Kraus, 1962. 173-223.

有権者はテレビ・ラジオ視聴以外には、ディベート・スクリプトを新聞で読んだり、テレビ・ディベートの評価をテレビ報道や雑誌、新聞メディアで読んだりもいた。しかし、有権者は新聞や刊行物の2倍テレビから情報を得ているという調査結果を、ケネディはディベート前に手に入れていたという。

Theodore C. Sorensen. *Kennedy*. 1965. Reprint, with new introduction. New York: Perennial Library, 1988.

シオドア・ソレンセン『ケネディの道—未来を拓いた大統領』大前正臣訳、サイマル出版社、1987、p. 98。

⁸ 票の改竄があったとも言われるが、真相が不明であった当時は、テレビ討論の映像的側面に答えを求める研究が進められた。

⁹ ソレンセン p. 104

¹⁰ Katz and Feldman, p. 196.

調査対象は選挙登録者で、1500人から8000人と推定される。調査手法はインタビューである。

¹¹ Katz and Feldman, p. 197.

¹² Sorensen. 1988.

ケネディ陣営側もテレビ・ディベートを評価している。ケネディのスピーチ・ライターであるソレンセンは、第1回テレビ・ディベートが選挙の追い風となったと評価している。8月の時点では棄権する予定の有権者がテレビ・ディベートによって25%分余計に投票したという。投票率は69%近くと高かった。そして11%いた浮遊層にもテレビ・ディベートは影響を与えたという。仮にテレビ・ディベート上での勝敗が引き分けであっても、テレビ・ディベートが行なわれたこと自体が選挙上でケネディに有利なものとして働いた。

¹³ Alan Schroeder. *Presidential Debate: Forty Years of High Risk TV*. Columbia University Press. 2000.

Diana Owen. “The Debate Challenge: Candidate Strategies in the New Media Age” *Presidential Campaign Discourse: Strategic Communication Problems*. Edited by Kathleen E. Kendall. Albany: State University of New York Press, 1995.

James N. Druckman “The Power of Television Images: The First Kennedy Nixon Debate Revised.” *The Journal of Politics*. Volume 65, No. 2, May 2003, pp. 559-571.

Kathleen Hall Jamieson, David S. Birdsell *Presidential Debates: The Challenge of Creating an Informed Electorate*. New York: Oxford University Press, 1988.

George Farh. *No debate: How the Republican and Democratic Parties Secretly Control the Presidential Debate*. Seven Stories Press, 2004.

Lawrence K. Grossman "Death of Radio Reporting: Will TV be Next?" *The Columbia Journalism Review*, September October 1998.

<http://www.findarticles.com/p/articles/mi_qa3613/is_199809/ai_n8811370>

Samuel Lubell. "Personalities vs. Issues." *Great Debates*. Edited by Sydney Kraus, 1962. 151-162.

Walter R. Mears. "Chapter One. First Impressions: The 1960 Campaign" *Deadlines Past: Forty Years of Presidential Campaigning: A Reporter's Story*. Kansas City: Andrews McMeel Publishing, 2003.

グレイディ・エンゲル・ラング、カート・ラング『『テレビに映る』という試練—ケネディ＝ニクソン論争』『政治とテレビ』神松一三訳、京都、松籟社、1997。

デイビッド・ハルバースタム『メディアの権力2』筑紫哲也、東郷茂彦訳、東京、朝日新聞社、1999。

エリック・バーナウ『映像の帝国—アメリカ・テレビ現代史』岩崎昶訳、東京、サイマル出版、1973。

テレビ史を研究するデイビッド・ハルバースタムは第1回テレビ・ディベートを指して「新しいメディアにとっても大勝利であった。数時間たつうちに視聴者は、番組で何が話されたのか、思い出せなくなる。候補者の外見やテレビの画面を通じて受けた印象しか残らなかった」とその画像の力を強調している(ハルバースタム1999: 326)。50年代のテレビ研究者のエリック・バーナウも、「この第1回ディベートをラジオで聞いたひとびとには、ニクソンが対等に勝負をしたと思えた。テレビだけで彼は敗北したのである」と結論付けている(バーナウ1973: 127)。

¹⁴ 松本道弘「第2章 TV ディベートを判定する—なぜケネディは勝利したか」『ザ・ディベートIII Historic TV debate—Kennedy vs. Nixon』金子節也編集、東京、グロービュー社、1981。

「ことばのボクシング判定—カーター、放言でやや不利」『Presidential Debate Between Carter and Reagan—または、ことばのボクシング』東京、グロービュー社、1984。

戦後、アメリカから日本へ競技ディベートを導入した松本道夫は、テレビ・ディベートを競技ディベートに見立て、競技ディベートの審査項目でもあるロジックの観点から、6対4でケネディに軍杯を挙げている。ニクソンがケネディに同意を示しすぎたりして「パンチ不足」であったことが敗因である、と松本道弘は評価している。一方で「同意を示してから各論の反論をする」という手法が競技ディベート上では当然であるとも松本道夫が述べている。競技ディベートでの正攻法がテレビ・ディベートでは敗因とみなされるという奇妙な振れがおきているのである。この振れは、テレビ・ディベートにおいてロジックだけでなくレトリックも強く求められていることを端的に示している。

¹⁵ Theodore Otto Jr. Windt "Chapter 1 The 1960 Kennedy-Nixon Presidential Debates" *Rhetorical Studies of National Political Debates, 1960-1992*. Robert V. Fiedenberg ed. Second Edition. Westport: Peager, 1994. 1-27.

¹⁶ グループμ『一般修辞学』佐々木健一、樋口桂子訳、東京、大修館書店、1995。

佐藤信夫『レトリック感覚』東京、講談社、1992a。

「レトリック認識」東京、講談社、1992b。

「レトリックの記号論」東京、講談社、1993。

グループμのレトリック区分、佐々木と樋口の解釈(1996)および佐藤の分類(1992)を指針とする。文の構造や長さも吟味するので、適宜原文を提示する。

¹⁷ マイルス・L・パターソン『非言語コミュニケーションの基礎理論』工藤力監訳、東京、誠真出版、1995。

アーチャー・デイン「第6章 勢力と競争のサイン」『ボディ・ランゲージ解説法』工藤力、市村英次訳、東京、誠真書房、1988。

ヴァージニア・P・リッチモンド、ジェイムズ・C・マクロフスキー『非言語行動の心理学—対人関係とコミュニケーション理解のために』山下耕二訳、北大路書房、2006。

言葉で説得するために用いられるレトリックと比較しながら、画像における非言語行動の分析を行なう。非言語行動とは、わたしたちが身体を使って行う多数の行動を指す。パターンソンによると、説得行動においては見られる非言語行動には主に、以下のものがある。(1) 凝視の増大、(2) 頭によるうなずき、(3) ジェスチャー、(4) 多彩な表情の変化、(5) 発話の声量と速さの増大、などである。カウンセリング場面において、カウンセラーが(1) 80%の凝視、(2) 微笑、(3) 肯定的な頭のうなずき、(4) ジェスチャー、(5) 相手の真正面に身体を向ける行為をとった場合に、そうでない場合よりも説得力があったと評定されている(パターンソン 148 頁)。自信のあるときはジェスチャーが増えるが、自信のないときにはセルフ・マニピュレーションが増える。また自信がある話し手は相手から視線を離さないが、自信のない話し手はめったに視線を合わせようとしない。説得的な非言語行動は中程度に与えるほうが、全く与えないものより評価が高い。しかし、非言語行動が強すぎると、威嚇や否定的な印象を与える。なお、政治家などの管理的地位にある人物は、感情の表出をコントロールする顔面管理技術が発達している可能性がある(リッチマン、マクロフスキー、81 頁)、本分析は候補者の内心の分析ではなく、画面上の表情の分析である。

¹⁸ Richard Nixon Library and Birthplace. 1960, *September 26- First Presidential Campaign between Vice President Nixon and Senator John F. Kennedy*. 2006. (DVD)
停止画像の所在を、DVDの最初からの時間から(時:分:秒)と示している。

¹⁹ 数々のゴースト・ライター(以下スピーチライター)たちが政治家の背後には潜み、彼らなしに今やアメリカ大統領制は回らないと言われる。(岡部朗一『政治コミュニケーション—アメリカの説得構造を探る』東京、有斐閣選書、1992。)スピーチにおいて有効なレトリックは、社会の共通認識としてのトポスを分析し、新しい見方を示すものである(アリストテレス『弁論術』戸塚七郎訳、東京、岩波書店、1992。)そのため、試行錯誤をしている段階のレトリック戦略を分析するのは重要である。

²⁰ 岡部 pp. 33-45。

大統領スピーチで見られる主要なイデオロギーには3種類ある。1) 神の加護のもとにある国 2) 自由の国 3) 日の出の勢いの国である。「神の加護のもとにある国」というレトリックは、この第1回テレビ討論でケネディは使用していない。ケネディ自身が、宗教観を意識させないレトリックを優先したからとみられる。ケネディは米国のマジョリティであるプロテスタント教徒ではなく、マイノリティで選挙に不利に響くとみられたカトリック教徒であった。一方で、ケネディは(1)としての「自由」、(2)としての「前進」のレトリックを2つの方法で使用した。

²¹ 直接視聴者の利益に反する政策は、承認を得にくい。一般化する傾向があるニクソンのスピーチと比較してみると、ケネディは語りかける対象を絞り、その対象にあわせた政策や概念の具体化を行った。第1にケネディは農業政策において、地名と生産物を換喩的に用い、農業で補助を受けない人にとっても、補助の対象がわかりやすく説明している。第2に自動車工業が農家に車を売ることを、「農家は自動車工業の市場」という経済活動に見立てる隠喩表現を用いている。第3に政府の借入金の削減に関して質問を受けた際、ケネディは借入金の削減ではなく利下げと社会保障税に財源を求めながら、教育制度を補助すると説明した。教育を投資になぞらえながら、教育補助を容認するようケネディは説得を試みている。

²² 当時ケネディにとって1番近い代の大統領であったにもかかわらず、自分からはトルーマンに1度しか言及していない。自分と同じ民主党出身の大統領であり、自分と同じ反共の闘士として、トルーマンに最低限の敬意を払うためのみに言及したとも考えられる。

²³ 「自由」も実は隠れたケネディのひとつのキーワードであった。1960年の冷戦のさなかで「前進する」理由として、共産主義に対抗する自由主義の「自由」と、1960年に同じく公民権運動が高まりの一環として黒人らの「自由」をケネディは唱えた。同じ単語に2つの意味を込める原語彙法を用いながら、1つのキーワードとしている。

²⁴ パターソン p. 148。

²⁵ F・ローズベルトの大統領の隠喩を、ケネディは副大統領候補となった1956年の民主党大会演説などでも用いているが、まだ政策と方針を深く関連させてはいなかった。

John Fitzgerald Kennedy Library. "Remarks by Senator John F. Kennedy at the Democratic National Convention" (Conrad Hilton, Chicago, Illinois on August 16, 1956, 2000)

²⁶ ケネディはスローガンが嫌いであり頻りに用いなかったが、「ニューディール (the New Deal)」や「フェアディール (the Fair Deal)」を継ぐ「ニュー・フロンティア (the New Frontier)」という考え方は好きであったと、ケネディのスピーチ・ライターのスレンセンは述べている (スレンセン 1965: 83 - 84, 93 - 94)。1960年第1回テレビ討論では、「ニュー・フロンティア」というキーワードは一度も出てきていないが、「前進する」または「再び動き出す」というキーワードが頻出していた。

²⁷ 中南米の見る先を、ソビエト連邦や中国でなく、アメリカ合衆国にしておきたいと語るときに、意味が逆なものを並列させて差異を強調するレトリック「対照法」を用いている。対照法は、相対する意味をもった言葉や句、または文を対照的に配置するもので、対照的な2つの物事を対比させることによって、それぞれの特徴を際立たせて印象を深める。

²⁸ ハルバースタム p. 323.

²⁹ 「運命との会合」(rendezvous with destiny) に関するスピーチは1933年ではなく、1936年にされたものである (杉本安、石井弘幸「第1章 歴史的TV ディベート—Presidential debate between Kennedy and Nixon」『ザ・ディベートIII Historic TV debate —Kennedy vs. Nixon』金子節也編集、東京、グローブビュー社、1981、19頁)

³⁰ 似ているために、「たとえ」が使われたのではなく、ある言葉が「たとえ」として使われることによって、似ている点が新しく見出されるものである (佐藤 1992a)。

³¹ 直喩法が用いられているのは、大恐慌時代のローズベルトと当時のケネディの経済状況が実際は大きく異なるためと考えられる。国家の赤字を増やす借入金削減に関して、ケネディは「テレビ討論」の中で、自分は増税もしないし、国家赤字も増やさないと公約している。ただし、上記のスピーチのあと、ケネディは、万が一、国家事業の費用と収益の均衡を破ることがあるとすれば、それは国家の重大な危機的状況のときか、深刻な景気後退に見舞われたときにかぎってだと補足をしている。一方でローズベルト政権は、最初から深刻な景気後退に見舞われたため、国家赤字を増やして、国家規模の建設事業を行なった。

³² ケネディが、過去の大統領の経験ではなく、近親の経験について言及することもある。第1に、弟ロバート・ケネディが中心となって、組合福祉費用を組合幹部のジミー・ホッフアが流用を迫ったことに関して、「私は、合衆国のなかで最大の規模を誇る労働組合において、ジミー・ホッフアのような人物が、いまだに自由でいることを見るのが不満です」と述べている。第2に、ニクソンに比べて未熟だと質問者に言われたとき、の隠喩の使用以外にも補強として、ケネディは自身が下院議員として14年間、上院議員として8年間在籍し、800回議会で議決を取り、外交委員会にも所属したなどの経験をも語っている。ただし自身の業績は比率と強調の仕方から判断すると、「大統領の隠喩」の補足である。(John Fitzgerald Kennedy Library. *The first Kennedy-Nixon debate*. 1960)

³³ Windt p. 17.

この質問内容と異なるケネディの返答を、ウィンドは「政治的意図」「戦略」と解釈している。しかし、上記で分析したように、ケネディにとってニクソンの強烈なトルーマン政権への攻撃が「戦略外」であったために、逡巡したケネディが反論の時期を一度逃して、再度ここで反論しているだけである。

³⁴ やりとり争点の争点は、「大きな政府」を目指す民主党ケネディにとっての弱点である財源についてであった。ケネディの均衡予算案自体が、このあとニクソンから実務的に不可能だと否定されている。

³⁵ パターソン p. 178。

相手を騙そうとするときや、否定的な結果が予想される対人関係に基づいて行動するとき、表情の管理が行われ、微笑が多くなる。肯定的な顔の表情は、本心を隠すため、そして、相手からの反応が否定的なものから肯定的なものになることを期待して使用されるということである。

³⁶ パターソン p. 148。

³⁷ Paul L. Kesaris “The John F. Kennedy 1960 campaign.” Microfilm, Part. 1, Reel 1-10 and Part 2, Reel 1-12. *Presidential campaigns. Research collections in American politics*. University Publications of America, 1986.

³⁸ The Advisory Council of the Democratic National Committee “The Restoration of the American Presidency.” The Presidency 7/8/56-5/11/60, JFK Pre presidential paper, 1960 Campaign Files, Richard Goodwin Files, IN Kesaris, Paul L. “The John F. Kennedy 1960 campaign.” Microfilm, Part. 1, Reel 1-10 and Part 2, Reel 1-12. *Presidential campaigns. Research collections in American politics*. University Publications of America, 1986.

³⁹ The Advisory Council of the Democratic National Committee, p. 7.
ブキャナン・タイプとして、ユリシーズ・S・グラント、チェスター・アーサー、ベンジャミン・ハリソン、ウィリアム・マッキンリー、ウィリアム・ハワード・タフト、ウォレン・G・ハーディング、カルヴィン・クーリッジ、ハーバート・フーヴァーが挙げられている。

⁴⁰ The Advisory Council of the Democratic National Committee, p. 9.
リンカーン・タイプとしてとして、トマス・ジェファソン、アンドリュー・ジャクソン、ジェイムズ・K・ポーク、グローヴァー・クリーブランド、シオドア・ローズベルト、ウッドロー・ウィルソン、フランクリン・ローズベルト、ハリー・S・トルーマンが挙げられている。

⁴¹ Quotations, February/8/60, The Presidency 7/8/56-5/11/60, JFK Pre presidential paper, Richard Goodwin Files, IN Kesaris, Paul L. “The John F. Kennedy 1960 campaign.” Microfilm, Part. 1, Reel 1-10 and Part 2, Reel 1-12. *Presidential campaigns. Research collections in American politics*. University Publications of America, 1986.

⁴² Quotations, February/8/60.

⁴³ Quotations, February/8/60.

⁴⁴ Quotations, February/8/60.

⁴⁵ Notes of Foreign Policy and the Presidency 1. Quotations, 9/8/60, The Presidency 7/8/56-5/11/60, JFK Pre presidential paper, Richard Goodwin Files, IN Kesaris, Paul L. “The John F. Kennedy 1960 campaign.” Microfilm, Part. 1, Reel 1-10 and Part 2, Reel 1-12. *Presidential campaigns. Research collections in American politics*. University Publications of America, 1986.

⁴⁶ アリストテレスに関しては、ケネディは大統領就任後のスピーチで言及している。

⁴⁷ Notes of Foreign Policy and the Presidency 1. Quotations, 9/8/60, p1.

⁴⁸ Notes of Foreign Policy and the Presidency 1. Quotations, 9/8/60, p1.

⁴⁹ “Johan Fontaine and Her Negro Screen Lover” A religious Issues Files of James Wine. JFK Pre presidential paper, 1960 Campaign Files, American Nationalist. IN Kesaris, Paul L. “The John F. Kennedy 1960 campaign.” Microfilm, Part. 1, Reel 1-10 and Part 2, Reel 1-12. *Presidential campaigns. Research collections in American politics*. University Publications of America, 1986.
例えば、ここでは人種問題に関して、カリブの映画に関するパンフレットが収集されている。

⁵⁰ Notes of Foreign Policy and the Presidency 1. Quotations, 9/8/60, p1.

- ⁵¹ Notes of Foreign Policy and the Presidency 1. Quotations, 9/8/60, p1.
- ⁵² "Quotations Undated," JFK Pre presidential paper, Richard Goodwin Files, IN Kesaris, Paul L. "The John F. Kennedy 1960 campaign." Microfilm, Part. 1, Reel 1-10 and Part 2, Reel 1-12. *Presidential campaigns. Research collections in American politics*. University Publications of America, 1986.
- ⁵³ Alexander Klein. "Memo for Sen. Kennedy," Nixon 8/12/60-10/30/60, JFK Pre presidential paper, 1960 Campaign Files, Richard Goodwin Files, IN Kesaris, Paul L. "The John F. Kennedy 1960 campaign." Microfilm, Part. 1, Reel 1-10 and Part 2, Reel 1-12. *Presidential campaigns. Research collections in American politics*. University Publications of America, 1986.
- ⁵⁴ Klein, p. 2.
- ⁵⁵ Klein p. 46.
- ⁵⁶ Klein p. 44.
- ⁵⁷ ラング=ラング pp. 120-123; 127-129。
- ⁵⁸ Schroeder pp. 44-48.
具体例の使用を、シュレイダーはテレビ・ディベートの「近年の傾向」として挙げているが、既に1960年のケネディ陣営で特に強力に推し進めていた。
- ⁵⁹ Klein P. 49.
- ⁶⁰ Klein P. 45.
- ⁶¹ 「黒人アイコン」とも言える公民権運動の中心人物であるキング牧師が、ケネディの選挙中に逮捕された際、ケネディは特に公開しなかったが手を差し伸べている。この結果、南部の黒人票が黒人指導者からの口コミで動いたと言われている（バーナウ1973）。また、大衆文化に関して、選挙陣営は、カリブ海黒人映画 "Island of the sun" に関する批判ビラを多数収集し、核実験に関する映画 "On the beach" へのレポートも作成している。(Kesaris)
- ⁶² Klein P. 8.
- ⁶³ シンプトン、キーファーヴァー、ジャクソン、フルブライト、マンسفールド、ゴア、ハリマン知事、シンボルとしてローズベルト夫人が挙げられている
- ⁶⁴ ロックフェラー、ポール・ホフマン、スタッセンなどの重要な共和党上院議員と下院議員が挙げられている
- ⁶⁵ William J. Clinton Presidential Library and Museum. <<http://www.clintonlibrary.gov/>>
- ⁶⁶ John W. Matviko The American Presidency in Popular Culture. Greenwood Press, 2005.
- ⁶⁷ Gril Marcus, *Double Trouble: Bill Clinton and Elvis Presley in a Land of No Alternatives*. Henry Holt & Co, 2000.
William J. Clinton Presidential Library and Museum. *Display material*. January 2006.

(本稿は松下国際財団研究助成金による研究成果の一部である。)